

牛 屎 院

MARCH 31, 1964

創 刊 号



鹿児島県立大口高等学校生物部

〈表紙解説〉

ヤマネ (*Glirulus Japonicus* SCHINS)

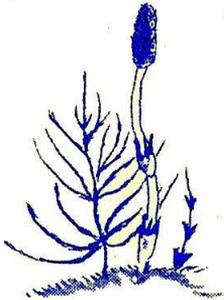
日本特有の一属一種のもので、本州・四国・九州に分布。九州では大分・熊本・宮崎の各県から記録されているもので、鹿児島では霧島山および大口市布計で採集されているが、測定その他の記録は残っていない。今後の採集に俟つ。背は淡褐色で頭頂から尾の基部まで極めて鮮明な黒色の一条の縦線があり、背の尾毛は二種で、長い上毛は短いものよりとび出しており、耳の基部には毛糸を有することがおもな特徴である。体下面は色淡く、背腹面の毛根は裏石板色で下面のそれは灰ねずみ色である。尾はリス類のごとく中部より先方は総状をなし、色は背と大差はない。吻には細長いひげがある。世界的珍獣で林中に生息、夜行性で、本州では12月上・中旬より山中の大樹洞や石社殿の屋根下などに枯葉で内形で毛球のごとくになって冬眠し、翌春さめて活動する。食物は果実・果実の種子、小さいハエなどを好む。

(日本哺乳類図説・三省堂)

目

次

I. 発刊によせて	2
II. 題名について	3
III. 北薩の観光ならびに採集地案内	4
IV. シダ類	6
V. タヌキの挿蔓ならびに蘭音記録	11
VI. 新入生感想文	13
VII. 大口市場の昆虫採集目録	17
VIII. 枕崎採集旅行の思い出	21
IX. コシアカツバメの生息地	26
X. 生物部に思う	28
XI. 部の活動記録	30



おちぼ

編集を終えて

(座談会)

枕崎採集旅行の反省

I. 「牛屎院」創刊に寄せて

顧問 森田 忠 義

長い間、胎動してはくずれ去り 不可能と思われていたことも 可能になった時には、たとえ不具者であっても、その陰の奮の喜びはかくしきれない。時間・忍耐・熱意、まわりに理解されているようでまったく認識されていない中での苦しみ、これを乗り越え、環境を改善していく努力、はなばなしの部の存在にくらべ、まったく表層の蘇力をもたない地味な部に対するものの見方、考え方、自主性を失ったような足どりに何處かくじけ、また、自分自身に強く言い聞かせて起き上がり、やっと、雑産ではあったが生命の息吹きを吹き出した……、これが今までの姿である。

ここに、一發のロケット、「牛屎院号」は発射されたのだ。いろいろと天候やその他の条件によって中止されていたものも、今は思い出となり、ゆっくり大気中に浮かんで行く。

鹿兒島県下の生物部誌歴は、昭和34年に「ORIENS」大島高校、昭和37年「あころ」鶴丸高校、昭和38年「まのせ」加世田高校、同年「牛屎院」大口高校と、第四番の部誌となり、10歳が全国へ飛び交うことになる。

現在の高校の部活動にも、悩み・苦しみも各学校異種多様であると思う。これを克服してはじめて未知の分野も開け行くものである。北薩の自然環境は最も恵まれており、未解決の問題も多く、材料も得やすい。大いに研究意欲をもち、牛歩であってもよい、コツコツと着実な成果を集積し、一片ずつでものせて世に送り、批判を御き、真理を追求する。また、部誌を通じて全国の若き世代を理解し合い、あいたずさえて自然に対する正しい理解と、その中に生ける生命体の保護の精神を磨き、育成に努め、邁進することを誓い、若き者の将来への道標なることを信じつつ、部の発展と「牛屎院」の将来を見守っていきま

II. 題名について

牛屎院(ウシクソイン)という名が伊佐郡を代表するものであったということは、現在ではほとんど忘れ去られようとしている。ここで大口高校生物部の縁談誌発行にあたり、北伊佐の郷土史をひもとき、この名の由来を明らかにするとともに、この伊佐地方にうまれる天然の未開な生物たちに科学のメスを入れ、後世にこの遺人の開拓を約束し、永遠にこの名を保存することを怠りて感喟といたします。

郷土史によると、いつ頃から呼ばれたかは明らかでなく、徳川の中期ごろまで用いられたもので、里・原田・太田・吉木・目丸・篠原・木之氏・小川内・小木原・牛尾・洲辺・平出水・山野・大島・鳥巢・白木・下殿・堂崎・金波田・川岩瀬・田代・宮人の22の村落を合わせて「院」とされ、院は、郡・郷・村を総括したもので、厩または垣の境とされ、大口城-牛山城は牛の窟ている形に似ており、その前庭の曲がれるところにあたる地に「眩曲(のじまがり)」、その尾に当たる所に「牛尾(うしお)」、尾の曲がれる前に「尾曲(おまがり)」の地名がある。また、伊佐地方の最高峰は十層山(国見岳一帯)であって、しかもこれが牛山城の尾の方向にそびえ、牛屎地方はこの十層山の支峰をもって包囲されているので、十層山の下、すなわち、「九層」地方で、これが訛って「屎」となり、牛山城の牛に因んで屎の文字をあて「牛屎院」と名付けたのである。

その後、慶長15年に牛山院と改名されており、現在の大口の地名に変わったようであるが、大口の地名についてはハッキリした記録がないようである。牛屎院の院司には木暮氏、牛屎氏、菱刈氏、相良氏あり、永禄12年(1569)8月、菱刈氏滅亡して島津氏に降り、新納忠元を大口の魁頭押之となしてから、牛屎院は島津氏の奥居となった、とある。(昭和5年発行「北伊佐史」による)

Ⅲ. 北薩の観光ならびに採集地案内

山野線、肥薩線の交点駅栗野駅より徒歩で約2時間、栗野岳温泉峡に着く。霧島山系の一支峰、栗野岳(1094m)の山腰に白煙を噴き上げる栗野岳温泉があり、山峡には胎動する湯煙、噴き出すイオウ分はあたりの草木を一画に化粧し、線梁き山荘に突に調和している。山麓は草履や人工林が開け取場に利用され、山頂直ぐに自然林の林相が見られる。こん虫の好採集地として知られているほかは、この温泉が突に山荘の「わび」「さび」の味を濃くする。

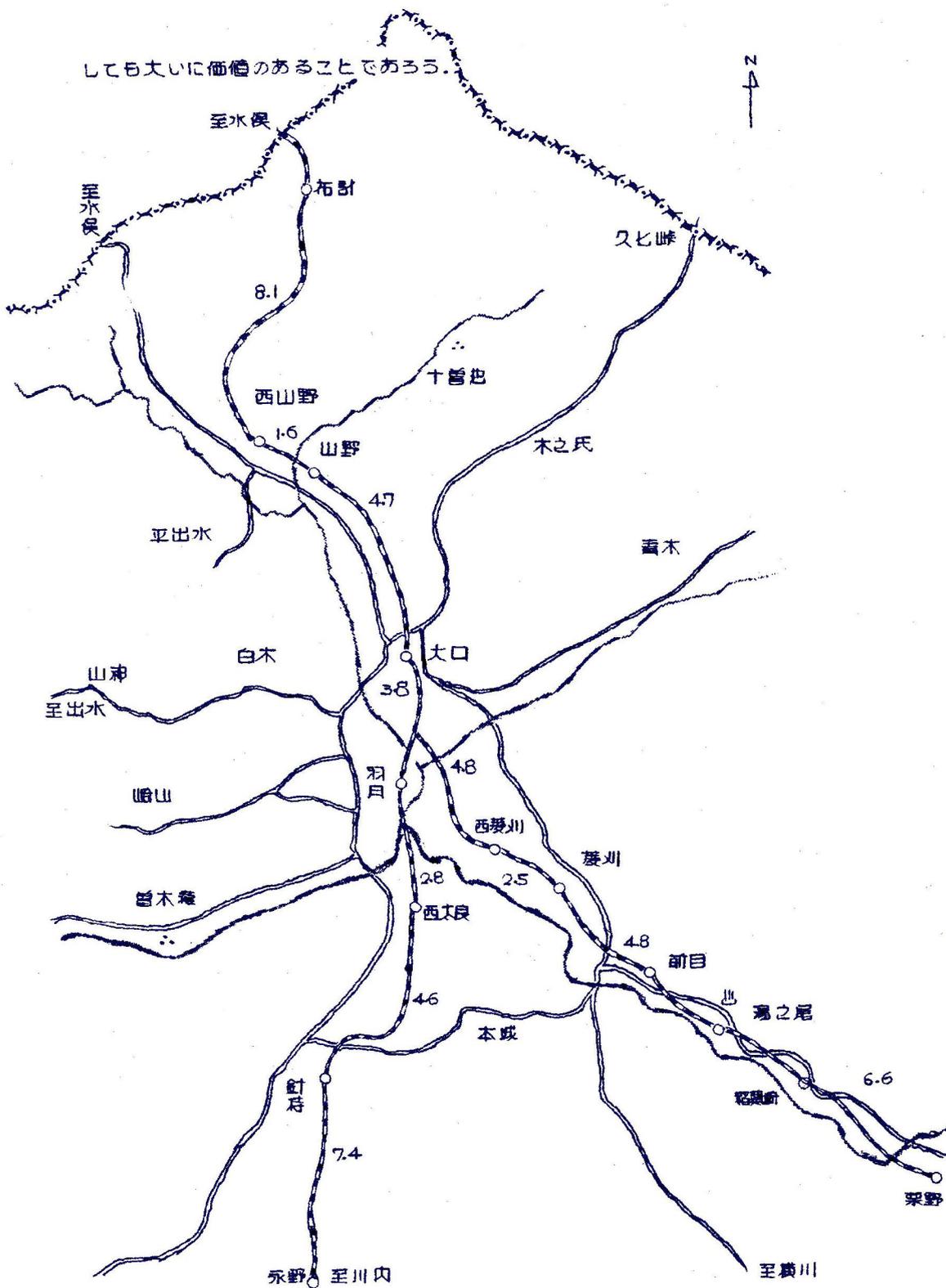
山野線に乗りこ約10分以内で、湯のちで知られる湯之尾。ここもまた伊佐平野に湧き出でる湯の町、町全体が湯とともに生きており、伊佐の野に働く人々の憩いの地となり、町を流れる川(川内川上流)には、天然記念物の「チズジノリ」や「カワゴクソウ」の自生地として知られ、チズジノリは最近では工場等の排液等のせいで減少しつつあるとのこと、関係者を心配させている。

大口市に入ると、採集地としては、こん虫では忠元公園・城山・木之民から久七峠の沿道等が挙げられ、その他伊佐平野の線線の市山等も好採集地と言える。さらに、山野より約2キロ、バスで約10分(大口からのバスは7月20日から8月末までキャンプ村の開閉期間に限り1日4往復で、その便は便がない)で十層に着く、十層には周囲約4キロのダムがあり、幅83m、高さ30m、灌がい用として作られたものであるが、夏季にはボートを浮かせ山峡の美を楽しませている、池の上方には県下唯一の県営養魚場が設けられ、面積3854m²の養魚池には、ニジマス・アユ・コイなどが飼われ、特にマスに力を入れ、今年は薩摩県の富士養魚場より20万ぐらいの卵を取り寄せてふ化させ、いろいろと試験され、その成果も上々のようである。コイは、この池方は海にほど遠いため、養殖が盛んで、こちらでは稚魚の民間への供給地の役割りを果しているようである。

大口駅から山野線で約15.4K、三つめに布計^{ふけい}駅がある。ここらが鹿兒島県最北端の地で、一時は布計鉱山で知られ、開発された村であるが、現在は採業をやっている、すっかりさびれ、その山麓の地に林業や農業を主にした所で、山林も原生林が見られ、山中にはサンショウウオの生息地や、タヌキ・ムササビ・ヤマドリ・ヤマネ等が住み、粗物相も未開地で興味深く、キャンプ、その他大自然の息吹きを生々と身に沁みて感ずる所であり、採集家の愛望の地である。

大口駅より肥之城線沿いに南下、バスで約20分(南国交通嶺山線)の池に有名な鶴木の滝公園がある。伊佐平野を流す水が一堂に会し、滝幅210m、高さ12m、滝の上には平坦な自然の臺石が斗臺を越え、雨期になると水量多く、ナイヤガラとも呼ばれる景観である、近くには刺原川川垂兵衛の滝臺石、堀之内良眼坊の御倉跡、大住古墳等の考古学の資料も豊富である。さらに南下すること15~16Kに現在建設中の鶴田ダムは、九州第1位を誇り、高さ117.5m、長さ450m、完成の時には南九州の産業発達の原動力となり、観光資源と

しても大いに価値のあることであろう。



IV. 羊 齒 類

羊齒類の山中さんを訪ねて

飯 塚 典 子

中間テストの終わった2月11日、大分地方のシダ研究の第一人者である山中さんを訪問した。山中さんは、大分市役所の共済課の係長さんで、シダ類研究の第一人者の豊禄十分な人である。

以下は、大分地方におけるシダの大体の分布であるが、この前に、大分地方は日本列島からいうと南部にあるが、しかし南部でいうと、鹿児島県の北海道ともいわれているように、北部にあたる。したがって、シダの種類も亜熱帯のものから温帯のものまで、その種類は多い。しかし、やはりその中で最も多いのは暖帯に属するものである、とのことだった。

○亜 熱 帯……大分市西南、釜木麓下流、羽月、田代方面

- ・カツモウイノデ(おしだ科) *Ctenitis subglandulosa* (Hance) Ching
- ・オオタニワタリ(ちやせんしだ科) *Asplenium antiquum* Makino
- ・ナンカクラン(まつばらん科) *Lycopodium foraii* Bak
- ・シロヤマシダ(おしだ科) *Diplazium hachiyoenense* Nakai
- ・シマシロヤマシダ(おしだ科) *Diplazium doederleinii* (Luerss) Makino
- ・オオイワヒトデ(うらぼし科) *Colysis pothifolia* (Don) Pr.
- ・スジヒトツバ(すじひとつば科) *Cheiropleuria bicuspis* (Bl.) Pr.
- ・シテンウラボシ(うらぼし科) *Colysis shintennensis* (Hayata) H. Ito

○暖 帯

- ・タニヌワラビ(おしだ科) *Athyrium atophorum* (Miq) Koidz.
- ・コクモウクジャク(おしだ科) *Diplazium virescens* Kunze
- ・オトコシダ(おしだ科) *Polystichopsis assamica* (Kuhn) Tagawa
- ・アミシダ(おしだ科) *Dictyocline griffithii* Moore var. *witotaii* (HK) Moore
- ・ホウノカワシダ(おしだ科) *Dryopteris shikokiana* (Makino) C. Chr.
- ・オオハナワラビ(はなわらび科) *Sceptridium japonicum* (Prantl) Lyon
- ・ゼンマイ(ぜんまい科) *Osmunda japonica* Thunb.

- ・ウラジロ(ウラボシ科) *Gleichenia Japonica* Sdr.
- ・コシダ(ふきしだ科) *Dicranopteris dichotoma* (Thumb.) Bernh
- ・オオカグマ(ししがしら科) *Woodwardia Japonica* (L.F.) Sm.
- ・ウラビ(いのもところ科) *Pteridium aquilinum* (L.) Kuhn var. *latiusculum* (Desv.) Und.
- ・ハチジョウシダ(いのもところ科) *Pteris fauriei* Hieron.
- ・キジノオシダ(きじのおしだ科) *Agiogyria Japonica* Nakai
- ・オオキジノオシダ(きじのおしだ科) *Plagiogyria euphlebica* (Kunze) Mett.
- ・ジュウモンシダ(おしだ科) *Polystichum tripterum* (Kunze) Fr.
- ・イリデ(おしだ科) *Polystichum polyblepharum* (Rom) Fr.
- ・イリデモドキ(おしだ科) *Polystichum Togawanum* Kurata
- ・サイゴクイリデ(おしだ科) *Polystichum pseudo-makinoi* Tagawa
- ・キヨスミイリデ(おしだ科) *Polystichum kiusiuense* Tagawa
- ・ヒロハヤブツテツ(おしだ科) *Cyrtomium macrophyllum* (Makino) Tagawa
- ・ミヤジマシダ(おしだ科) *Cyrtomium balansae* (Christ) C.Chr.
- ・コバノカナウラビ(おしだ科) *Polystichopsis pseudo-aristata* (Tag.) Tagawa
- ・ホソバカナウラビ(おしだ科) *Polystichopsis aristata* (Forst.) Holtt
- ・ハカタシダ(おしだ科) *Polystichopsis simplicior* (Makino) Tagawa
- ・ミドリカナウラビ(おしだ科) *Polystichopsis Nipponica* (Ros.) Tagawa
- ・ナガサキシダ(おしだ科) *Dryopteris sieboldi* (van. Houtte) O. Ktze.
- ・イワハゴ(おしだ科) *Dryopteris atrata* (Wall) Ching
- ・ツクシイワハゴ(おしだ科) *Dryopteris commixta* Tagawa
- ・オクマウラビ(おしだ科) *Dryopteris uniformis* (Makino) Makino
- ・イワハゴモドキ(おしだ科) *Dryopteris Mayebarae* Tagawa

- ・クマワラビ(おしだ科) *Dryopteris lacera* (Thunb.) O. Ktze.
- ・ナガバノイタチシダ(おしだ科) *Dryopteris sparsa* (Ham) O. Ktze.
- ・オオイタチシダ(おしだ科) *Dryopteris pacifica* (Nakai) Tagawa
- ・マルババニシダ(おしだ科) *Dryopteris fuscipes* C. Chr.
- ・ヌカイトチシダモドキ(おしだ科) *Dryopteris gymnosora* (Makino) C. Chr.
- ・ゲンゲジシダ(おしだ科) *Phegopteris decursive-pinnata* (van Hall) Fec
- ・ハシゴシダ(おしだ科) *Lastrea glanduligera* (Kunze) Moore
- ・ミゾシダモドキ(おしだ科) *Lastrea omeiensis* (Bak.) Copel
- ・イブキシダ(おしだ科) *Lastrea subochthodes* (Ching) Tagawa
- ・ミゾシダ(おしだ科) *Leptogramma mollissima* (Fisch) Ching
- ・ホシダ(おしだ科) *Cyclosorus acuminatus* (Houtt) Nakai
- ・カラクサイヌワラビ(おしだ科) *Athyrium clivicola* Tagawa
- ・ヒロハイヌワラビ(おしだ科) *Athyrium wardii* (Hook) Makino
- ・キヨタキシダ(おしだ科) *Athyrium squamigerum* (Mett) Ohwi
- ・シケシダ(おしだ科) *Athyrium Japonicum* (Thunb.) Copel
- ・アラシダ(おしだ科) *Diplazium subsinuatatum* (Wall) Tagawa
- ・ノコギリシダ(おしだ科) *Diplazium wichurae* (Mett) Diels
- ・イヨクジャクシダ(おしだ科) *Diplazium Okudairai* Makino
- ・ミヤマノコギリシダ(おしだ科) *Diplazium mettenianum* (Miq) C. Chr.
- ・ヒカゲワラビ(おしだ科) *Diplazium chinense* (Bak) C. Chr.
- ・イワヤシダ(おしだ科) *Diplaziopsis cavaleriana* (Christ) C. Chr.
- ・トラノオシダ(ちゃせんしだ科) *Asplenium incisum* Thunb.
- ・グルマシダ(ちゃせんしだ科) *Asplenium wrightii* Eat.
- ・ヒノキシダ(ちゃせんしだ科) *Asplenium prolongatum* Hook.

- ・アオガネシダ(ちやせんしだ科) *Asplenium wiltonii* Mett.
- ・ホウビシダ(ちやせんしだ科) *Asplenium unilaterale* Lam.
- ・アオネカズラ(うらぼし科) *Polypodium Niponicum* Mett.
- ・ノキシノブ(うらぼし科) *Lepisorus thunbergianus* (Kaulf.)
Ching
- ・マメツタ(うらぼし科) *Lemmaphyllum microphyllum* Dr.
- ・クリハラン(うらぼし科) *Neocheiropteris ensata* (Thunb.)
Ching
- ・マノネシダ(うらぼし科) *Neocheiropteris subhastate* (Bak.)
Tagawa
- ・ヒトツバ(うらぼし科) *Dyrrosia lingua* (Thunb) Farwell
- ・ヌカボシクリハラン(うらぼし科) *Microsorium buergerianum*
(Miq) Ching
- ・イワヒトデ(うらぼし科) *Colysis elliptica* (Thunb) Ching
- ・ミツデウラボシ(うらぼし科) *Crypsinus hastatus* (Thunb.)
Copel.
- ・イワヤナギシダ(うらぼし科) *Lorogramme salicifolia* Makino
- ・ヒモラン(ひかげのかずら科) *Lycopodium Sieboldi* Mig

○温 帯

- ・フコハナワラビ(はなばらび科) *Sceptridium ternatum* (Thunb.) Lyon
- ・ヤマドリビンマイ(せんまい科) *Osmundastrum cinnamomeum*
(L.) Pr.
- ・キヨヌミコケシノブ(こけしのぶ科) *Mecodium oligosorum* (Makino) H. Ito
- ・コウヤコケシノブ(こけしのぶ科) *Hymenophyllum barbatum* (V. d. B.) Baker
- ・コバノイシカグマ(いのもとろ科) *Dennstaedia scabra* (Wall) Moore
- ・オオカジシダ(いのもとろ科) *Monachosorum flagellare* (Maxim) Hayata
- ・イヌガンソウ(おしだ科) *Matteuccia orientalis* (Hook) Trev.
- ・カタイノテ(おしだ科) *Polystichum Makinoi* Tagawa
- ・リョウメンシダ(おしだ科) *Polystichopsis standishii* (Moore) Tagawa

・タカノハウラボシ(うらぼし科) *Crypsinus engleri* (Luer) Copel.

○世界的に言って大口だけにあるもの

・ハツキヌワラビ(おしだ科) *Athyrium xpseudo-iseanum* Kurata

・イサワラビ *Diplazium Tetsu-Yamanakae* Kurata

・サツマクジャク *Diplazium Satsuma ensi* Kurata

・ヒサツヌワラビ(おしだ科) *Athyrium* S.P.

・ヤマナカシダ *Dryopteris Tetsu-Yamanakae* Kurata

○日本的にめずらしいもの

・サツマシダ

・ハイコモチシダ

・ヒメムカゴシダ

・ヒモヅル

・ツクシオオシクジャク

・カラクニヌワラビ

・キノクニヌワラビ

・ムラサキベニシダ

・ヤウラハチジョウシダ

・ヒサツイノテ

・イズヤブソテツ

・ナガサキシダモドキ

・ハコネオオクジャク

・ワカナシダ

・オオカラクサイヌワラビ

・イズイヌワラビ

・アカメクジャク

・ヒユウガシダ

・クワレシダ

・タキミシダ

・ホソバヤブソテツ

V. タヌキの捕獲ならびに飼育記録

森田忠彦

南日本のタヌキの棲息地について見ると正確な記録は少なく、調査を進めていくにつれかなり寡数棲息し、その地域も広く、鹿児島県北部の山岳地や大隅の高嶺山系には今なお繁殖しているもようで、南薩でも昭和32年11月に指宿駅の近くでも捕獲されており、数は少ないがまだ棲息しているといえる。

では、大隅地区で捕獲された例を示して参考に供しよう。

【第一例】

昭和32年11月10日（毎日新聞発表）

測定値：体長 50 cm 尾長 40 cm

採集者：堅山 敏 蔵

飼育者：久野 達 己

採集地：大隅市鹿之尾

大隅中学校横のさつまいも畑で農作業中、堅山さんの飼犬エス公が突然吠えはじめたので、見たところ、タヌキを木の上に追い上げていた。堅山さん夫婦が近づくと、これに気付いたタヌキは、サッと木から跳びおり逃げ出した。そこでエス公はさすがに追跡し、数分後にグッタリしたタヌキをくわえて帰って来た。これを見た堅山さんは、てっきり死んだものと思いき、今夜はタヌキ汁でもしようか……と、水をぶっかけたところ、死んだふりをしていたのが急にムクムク動き出したので、急いで持ち帰り、オリを作って飼うことになった。これを聞いた毎日新聞社大隅支局長の久野達己氏がもらい受け、飼育するようになった。はじめは生イモを与えたら好んで食べ、不足したので焼き芋を与えたところ、これもよく食べた。しかし米飯は食べない。三日目に塩イワシを与えたら、二尾はよるこんで食べたが、あくる朝になるとはげしいけいれんにおそわれ、昼ごろまで同じ状態が続いたので、獣医の診断を仰いだら、塩イワシのためだと言われた。けいれんが弱まるにつれ、夕刻には静かに息を引きとり、冷めなくなった。

【第二例】

昭和37年11月8日（南日本、朝日、毎日各新聞発表）

測定値：？

採集地：大隅市山野（写真所有）

採集者：大隅警察署員（氏名不詳）

大隅市山野の尾之上・新原バス停留所との間、瀧原石切場の近くで、11月6日午前3時頃、パトロール中のジープを追い越し、ライトに目がくらみ、うるたえるところを大隅警察署の「御田」となったものである。場所は部落より一里ぐらゐ離れた山中で、路面の片側は谷川、他方は雑木や草の混生する所である。つかまったタヌキはそのまま大隅小学校へ

子どもたちの教材にと容納されたのであるが、飼育場が完全でなく、夜間に逃げられてしまった由である。話しを総合してみると幼獣のようである。

〔第三例〕昭和38年12月5日(採集)

採集地 : 大口市 市山

採集者 : 久保文則

測定者 : 頭胴、480mm、尾長、120mm、後肢、100mm(右足)、耳、51mm

飼育者 : 森田忠義

大口市中山の久保氏により、山中の穴の中に2頭住むものを発見、2頭とも捕獲し、そのうちオス1頭を寄贈していただいた。他の1頭はメスであった由である。金網がなく、リングの空箱を利用して飼うことにしたが、昏睡は殆んど隅の方でうずくまり、非常に警戒心が強く、ときどき伏目がちに外部をうかがう程度で活動は見られず、夜間になると、箱をあの強力な爪でがじり、実験室内は所きらわす異れまわり、特に人間の手垢の着いたものは容赦なく歯や爪にかけ、寝わくや腹線までもがみきり、翌朝は何くわぬ顔でまた昨夜こわした箱の中にうずくまっている。とうとう最後には空箱を二重にして入れたが、それでもこわす始末であり、金網の必要性を痛感した次第である。エサはおもに魚類の内臓や頭部、骨を与えた。とくに血液のついたものは好んで食べた。魚とネズミの肉を同時に入れてやると、やはり、木乳類の肉を好むようであり、植物質については材料がなくて試すことができなかったのは残念であった。

以上の点から考察するに、南九州のタヌキについて次のことが要約された。

- 分 布 : 紫尾山、布計、間根ヶ平、栗野岳、霧島山、高取山、間瀬岳等に広く分布している。
- 食 性 : 木乳類を最も好み、魚類等の動物質を優先し、植物質もいくらか摂るようである。
- 習 性 : 「溜糞」のこぼれごとく、巣穴内には絶対に脱糞せず、一定地域に行なう。尿は着しい臭気を発し、その存在を確認しうる。



VI. 新 入 生 感 想 文

生物部員として一年間を顧みて

1年D組 集 美奈代

あと数日かで、私の生物部員としての一年間が終わるわけですが、私が入部したのが去年の4月中ごろであった。動機としては、中学時代の先輩であり友達でもある田島さんの紹介と、現在でもそうであるが当時、理数系統の不得手な私は、生物部に入部したら少しはよくなるかもしれないという気持ちからでした。

まず、入部してみると、他のクラブより部員数が少ないということが最初に感じられた。人数を調べてみるならば、三年生の男子は1名もいず、女子が3名、二年生の女子2名といわゆる今度新しく入部した一年生が、男子7名、女子5名、全部員17名であった。ここで、部長である田島さんに、二、三年男子のクラブ員のない理由を聞いてみると、彼らは、生物を習っていないせいだろうとのことだった。しかし、人数が少ないゆえだろうが、みんながよくまとまっているように思われた。

私が入部していちばんはじめの仕事は、4月のはじめ、奥公園附近の植物採集で、標本にした植物の名まえや学名を調べることだった。これは、慣れるまでにはなかなか根気のいる作業で、はじめての私には1本を調べるのに、短かくて20分、ときには半時間かかってわからないものもあった。けれども、一生懸命に調べて、やっとめつかったという時の気持ちは実に快いものでした。

夏休みにはいり、三日間の予定で枕崎採集旅行に行った。先生2人と、女子組4人(田島・川畑・鮎塚・浜木・集)、男子組5人(若松・松本・長谷川・堅山・三反田)、計12名のメンバーである。枕崎に着くと、さすがに魚の町だけあって、何やら魚のおいづぶんとしてくる。宿舎は立神小学校であった。あくる日の午前中は、立神の近くまで船に乗せてもらった。はじめのうちはみんなはしゅいでいたが、立神近くになると船に酔い、顔はまっさおになっていた。午後は海岸まで採集に行った。さいわい、小学校の先生方2人が案内してくださったので、いろいろなめずらしいものを採ることができた。その夜は大きな「カツオ」を買い、サシミにして食べた。先生方2人が外出されたあと、松本さんに留守番を頼んで、私たちみんなで風呂に行った。帰ってからトランプなどして遊び、翌朝早く帰りのバスに乗り枕崎を後にしたが、この採集旅行は私にとって最も楽しい思い出となっている。

長い休みも終わって二学期になると、休み中の採集物の整理で忙しかった。なにしろ、採集物は橋らぬようにクロロホルム水に着けてあるため、ふたを取ると薬のにおいで鼻がまひするようだった。二学期中ごろの文化祭には、これまでの採集物など出陳した。

二学期も終りに近い頃、サンショウウオの採集に山野の布計まで出掛けた。布計では、

布計水の6年生の子どもがサンショウウオのいる所まで案内してくださった。行く途中、息ぎれのするようなけわしい所もあり、一体にジメジメしているような感じがした。現地に着くと、すでに布計水の先生と、三・四人の布計中の生徒さんたちが待っておられる。サンショウウオの住むという小さな流れのあたりには、コケが10センチぐらいつもっている。サカナを捕えるために流れに手をつけると、管中のおたりまでゾクッとするほど冷たかった。その日はサンショウウオを採集して帰ったが、それから幾日かは、そのエサ採りが大変だった。ミミズなんて今まできたないきたないと思って、さわってもみながったのに、いざとなると人間は匂でもできるものだ。

さて、これまでざっと一学期に私にとって重要であったり、おもしろかったりしたことを書きましたが、残念なことに私はいつも他の人たちについてまわるだけでした。でも、一学期生物クラブにいて、成績の方はともかくとして、生物が前よりは少し好きになったことは、私にとって決してムダではなかったと思います。そして、明るく高校生活を過ごすためにも、できたら来学年も生物部にはいりたいものです。

生物(植物)講習会に参加して

一丘 富吉 安子

去る夏休み日の一日、鹿兒島市博物館長井口重雄氏、鹿大農学部教授初島和彦氏、地元植物研究者山中氏、それに伊佐大口地区の小中学校教員を交じえて「生物(植物)講習会」が大口市の福祉会館で開催され、われわれも生物部員としてこれに参加した次第である。

実は、もし天気であつたら一同十首池で実際に植物採集のあり方の指導を受ける予定であつたが、あいにくの雨天で中止になり残念であつた。しかし、井口氏、初島氏、山中氏の講演は、われわれに興味を持たせるに充分であつた。以下諸氏の講演の内容を要約してみよう。

(初島鹿大教授)

○短期間で簡単にできる植物採集法

まず、植物を採集したなら、ただちに1枚の新聞紙を四つに折り、その間に植物をはさんで、4~5箇所のおもしきをする。なお、4、5日ほど仕上げる場合は1日に1回は必ず新聞紙をとり換えること。弱いアイロンを2~3回当ててもよい。しかし、この場合変色するおそれがあるので注意する。

○採集旅行等の場合、長期間新鮮な植物の保存法について

夏いぶん採集旅行に行き、採集はたくさんしたが、さてこれをどうして処理すべきか、新しいままで保存するには? といった場合大変困ってしまう。こんなときは、大きめのナイロンかビニール袋を持参して、植物を新聞紙の上におせ、アルコール(メチル)を口の中にふくみ、その植物の上に吹きかけ、新聞紙を巻いていっしょに袋に入れ、空気が残ら

ないようにしっかりと口を締めておけば、7~8日は安全である。

○美しい植物の方法、ランの花びらのようにやわらかい花をそのままの風味での保存の方法

美しいランの花など、おしぼなにするには花びらが裂ける、といったような場合は、ランの花を採集した時、花びらだけを取り、アルコール木でみたした採集びんに入れておく。散りやすい花びらなども別に保存する。標本を作るとき、花・実・根ともそろったものなるべく集め、花・実など別に右下の所に小さいナイロン袋に入れておく。

結びとして「皆はなかなか植物の名を覚えにくい。それをいかに覚えるべきか」ということだった。これは、植物採集する場合、場所・月日をテープに記入し、それを植物に結ぶ。そして、標本を作る時、新聞を換える時、覚えるのが最も合理的である。

【井口博物館長】

みんな、小学校や中学校のとき夏休みの宿題として植物やこん虫採集をやっているが、しかし、標本は作ったにしろ名まえを調べるのが困難だ。だからみんな、採集を怠ったり名まえを調べないままに提出する。採集というものは、標本を作っても名まえを知らなかったら無意味だ。だから、なるべく科名・学名等記入すること。それらを利用し鹿児島市博物館では、8月31日に、名まえのわからないものを寄せて、名まえをつける会を催している。そんなとき、特に高校・大学生たちが点を取るがために一日に只類をとって持ちこむ者が多い。もしきみたちが名を知らない場合は、いつでも博物館あて送りなさい。いつでも調べてあげよう……。と心あたったがい指導を与えてくださって、感謝している次第です。

最後に、大口市役所にお勤めの山中氏は、伊佐地区のシダ植物の研究に熱意を持たれ、数百種におよぶ植物を収集されておられ、同氏のお話によると、わが伊佐地方は、屋久島に次ぐシダ植物の産地であるとのことだ。

われわれも、自然に恵まれたヒンターランドを持ちながら、もっともっと生物活動を各苑にやらねばならないと思う。

新 部 員 と し て

一 日 の 組 長 谷 川 彦 彦

高校に入学して、生物部の「虫好き集まれ!!」のポスターを見たとき、先生や上級生にどんなことをやるのかも聞かず、自分勝手に、たぶん解剖や標本作りなどを行なうものと決め、採集のことも思っただけで入部した。

入部してみたら、上級生は女ばかりだったが、われわれ新入生が男子5名だったのでいくら安心した。しかし、解剖どころか、コン虫・小動物の採集など一回も計画してくれない。上級生の作った標本を見ても植物ばかりである。ほくは元来、植物についての仕事

や名まえはあまりよく知らず、興味を有っていなかった。しかしどうせ入部したのだから
と思い、生物部のためにやろうとハリキッたが、やる仕事といえば、色のあせた植物の新
聞紙を新しいのと取り換えるだけのこと、ときたま、鉢植えの植物に水をくれる。それぐ
らいの仕事だけで、たいしたこともない。

そんなことで、サンショウウオ採集計画のときにも、ほったらかした気持ちになり、と
うとう参加しなかった。参加した部員の松元君にあとで詫しを聞き、ぼくも行けばよかっ
たと後悔したが、後の祭りだった。動物採集は後にも先きにもこれが1回だけだったので
まったく残念なことをした。

新入生男子5名のうち、いちばんまじめにこの一年間をおし通したのは、彼、すなわち
松元君であろう。松元君のまじめさには感心する。部の仕事で、ほかの人のしなかつた仕
事は、ブツブツ言いながらも彼がたいていやってのけた。報道・宣伝・計画など、すべて
彼の行ないと言えるであろう。



Ⅳ. 大口市地方の昆虫採集目録

森田 忠 義

大口市および伊佐、始良郡の北部のこん虫の調査は不充分であり、今後のこの方面の調査も必要である。では、下記に大口市で生息の確認されたチョウの採集目録を掲げて参考に供します。

○せりちょう科 HESPERIIDAE

1. ダイミョウセセリ *Daimio tethys daiseni* Riley
62. Ⅷ. 20. 十曾
2. アオバセセリ *Choaspes benjaminii Japonica* Murry
63. Ⅶ. 25. 鳥神山
3. ヒメキマダラセセリ *Ochlodes ochracea rikuchina* Butler
63. Ⅶ. 26. 笹野
4. コチヤバネセセリ *Thoressa varia* Murray
63. Ⅶ. 5. 忠元
5. オオチヤバネセセリ *Polytremis pelluchida* Murray
63. Ⅶ. 25. 鳥神山
6. イチモンジセセリ *Parnara guttata* Bremer et Gray
63. Ⅶ. 大口
7. ミヤマチヤバネセセリ *Pelopidas Jansonis* Butler
63. Ⅶ. 12. 笹野
8. ホリバセセリ *Isoteinon lamprospilus* Felder et Felde
63. Ⅶ. 22. 木地山
9. キマダラセセリ *Potanthus flavum* Murray
63. Ⅶ. 22. 十曾

○あげはちょう科 PAPILIONIDAE

10. ジャコウアゲハ *Byasa alcinous alcinous* Klug
園根ヶ平, 高陵山, 笹野, 木之氏, 牛尾, 63. Ⅶ.
11. アオスジアゲハ *Graphium sarpedon* Nipponum Fruhstorfer
木之氏, 大口城山, 忠元, 63. Ⅶ. Ⅵ. Ⅷ.
12. ミカドアゲハ *Graphium doson albidum* Wileman
木之氏, 63. Ⅶ. 12
13. アゲハ *Papilio xuthus* Linne
高陵山, 木之氏, 大口, 笹野, 十曾 63. Ⅶ~Ⅷ

14. キアゲハ *Papilio machaon hippocrates* C. et R. Felder
国見山 62. Ⅳ. 26
15. クロアゲハ *Papilio protenor demetrius* Cramer
布計, 大口, 宿野, 62. Ⅳ ~ 63. Ⅴ
16. ナガサキアゲハ *Papilio memnon thunbergii* von Siebold
大口, 木ノ氏, 62. Ⅳ ~ 63. Ⅴ
17. モンキアゲハ *Papilio helenus nicconicolens* Butler
牛尾, 大口, 魚神山 62. Ⅳ ~ 63. Ⅴ
18. ミヤマカラスアゲハ *Papilio maachii tutanus* Fenton
大口, 国見山, 62. Ⅳ
19. コラスアゲハ *Papilio bianor dehaani* C. et R. Felder
大口, 63. Ⅴ

オシロチョウ科 PIERIDAE

20. モンキチョウ *Colias erate poligraphus* Motschulsky
木之氏, 63. Ⅴ. 26
21. ツマグロキチョウ *Eurema laeta bethesba* Janson
大口, 63. Ⅴ. 1
22. キチョウ *Eurema hecabe mandarina* de l'orza
大口, 63. Ⅲ. 21
23. モンシロチョウ *Pieris rapae crucivora* Boisduval
大口, 63. Ⅲ. 17
24. ツマキチョウ *Anthocaris scolymus* Butler
大口, 63. Ⅳ. 25
25. スジクロチョウ *Pieris melete* Menetries
大口, 63. Ⅳ. 25

オシジミチョウ科 LYCAENIDAE

26. ムラサキシジミ *Narathura Japonica* Murray
大口, 布計, 63. Ⅵ. 22
27. ムラサキツバメ *Narathura bazalus turbata* Butler
十巻, 62. Ⅳ. 31
28. ベニシジミ *Lycaena phlaeas daimio* Seitz
木之氏, 63. Ⅳ. 14
29. ウラナミシジミ *Lampides boeticus* Linne
十巻, 63. XI. 10

30. ルリシジミ *Celastrina argiolus ladonides* de L. orza
十曾, 63. VI. 22
31. サツマシジミ *Celastrina albocaerulea sauteri* Fruhstorfer
牛尾 (?)
32. ツバメシジミ *Everes argiades hellotia* Menetries
笹野 63. IV. 14
33. ヤマトシジミ *Zizeeria maha argia* Menetries
大口, 十曾 62. VIII ~ 63. V
34. ゴイシジミ *Taker Hamada* Druce
高隈山 62. V. 24

オラギンシジミ科 CURETIDAE

35. ウラギンシジミ *Curetis acuta parecuta* de Niceville
大口, 62. V ~ 64. III 20

オトグチャウ科 LIBYTHEIDAE

36. テングチャウ *Libythea celtis celtoides* Fruhstorfer
羽日 63. VII

オマダラチャウ科 DANAIDAE

37. アサギマダラ *Caduga sita Nipponica* Moore
城山 63. VII ~ VIII

オタテハチャウ科 NYMPHALIDAE

38. ゴマダラチャウ *Hestina Japonica* C. et R. Felder
城山 63. V. 23
39. コムラサキ *Apatura ilia* (f. *substituta* Butler)
羽日, 大口 63. V ~ IX
40. イチモンジチャウ *Ladoga camilla Japonica* Menetries
牛尾, 大口 63. V ~ IX
41. コミスジ *Neptis aceris intermedia* W. B. Pryer
木之氏, 笹野 63. IV ~ IX
42. サカハチチャウ *Araschinis burejana strigosa* Butler
木之氏, 笹野 62. V ~ 63. VIII
43. スミナガシ *Dichorragia nesimachus nesiotus* Fruhstorfer
羽日, 鳥神山, 十曾 63. V ~ VII

44. キタテハ *Polygonia c-aureum* Linne
忠元 63. V. 5
45. アカタテハ *Vanessa indica* Herbst
大口 鳥神山, 忠元 63. V~X
46. ルリタテハ *Kaniska canase no-Japonicum* von Siebold
大口 63. IV. 20
47. ツマグロヒョウモン *Argyreus hyperbius* Linne
忠元, 大口 63. V~64. III
48. イシガクテウ *Cyrestis thyodamas mabella* Fruhstorfer
世野, 大口, 十巻 62. IX~64. III
49. ウラギンヒョウモン *Fabriciana adippe pallesceus* Butler
山野 63. VII. 5
50. メスグロヒョウモン *Damora sagana liane* Fruhstorfer
布計 63. VI. 18
51. ウラギンスジヒョウモン *Argyronome laodice Japonica* Menetries
山野 63. VI. 3
52. オウラギンヒョウモン *Fabriciana nerippe* C. et R. Felder
山野 63. VII. 4
53. クモガタヒョウモン *Argynnis anadyomene midas* Butler
鳥神山 63. V. 19

○ジャのめちょう科 SATYRIDAE

54. クロコノマチウ *Melanitis phedima oitensis* Matsumura
布計, 大口 62. III~63. III
55. ジャノメテウ *Minois dryas bipunctatus* Motschulsky
大口 (?)
56. ヒメジャノメ *Mycalesis gotama fuliginis* Fruhstorfer
大口, 世野, 木之氏 63. V~IX
57. ウラナミジャノメ *Ypthima motschulskyi* Breme et Gray
十巻 63. VII. 10
58. ヒメウラナミジャノメ *Ypthima argus* Butler. 大口 63. V. 18
59. クロヒカゲ *Lethe biana* Butler 大口 63. V. 17
60. キマダラヒカゲ *Neope goschkevitschii* Menetries
羽月 63. V. 18

以上、9科、47属、60種および亜種を記し、記録されていても未確認種は今後追補する。
以上の標本は古江広海氏ならびに筆者の標本による。

Ⅳ. 枕崎採集旅行の思い出

一年G組 聲山美行

8月25日に出発して、27日に帰ってきた生物部の採集旅行には、数多くの思い出がある。期間こそ短かったが、楽しい思い出、または苦しい思い出がたくさんあった。

楽しい思い出として、25日の夕食がまず最初に挙げられるだろう。いや、これは、楽しい思い出というよりも、小学校の記憶をよみがえらされた。ぼくたちが小学校のときはじめて炊いたご飯と同じである。あのようなご飯を食べさせられたのは、それ以来のことであった。もちろん、これは悪口ではないから、これを炊いた方は気を悪くしないでください。むしろ、このようなことがあって楽しい思い出ができたのだから……。ときにはこのようなこともあってよいのだと、ぼくは思う。

また、最後の夜のトランプ遊びや、朝食の時みんなそろっての楽しい話し合いや、昼食なども楽しい思い出として、ぼくの記憶にいつまでも残ることであろう。

しがしまた、楽しい思い出の反面、苦しかった思い出もないではない。その第一として挙げられるのが、漁船に乗せてもらい立神の岩を回ったときに船酔いしたことである。ぼくはこれまで船には何回も乗ったことがあるが、船酔いにかがったのは、これがはじめてであった。あいにく波の荒らかったことや、船が小さかったことが原因だと思う。しかし、ぼくのはたいしたことはなかったので、海水に手をつこんだり、流れてくる海藻を取ろうとしたりして気分を直せた。でない但の酔吐は、さぞきつかったろうと同感する。

第二に汽車内でのことだ。福島であるうえ、汽車の音は騒がしく、しかもおまけに何時間も立ち通し、とあっては、肉体的にも精神的にも非常に苦痛であった。私鉄だからこうなのかな、なぜ国鉄はここを走らないのだろうか。

さて、この旅行の本来である採集について述べると、まず期間がみじかかったことが挙げられよう。2泊3日とはいふものの、採集したのは、たったの一日である。その一日のうちでも実際に採集した時間はごくわずかである。でもこの短時間のうち相当採集できたのだから、もう一日ぐらひ延ばしたならば、もっともっとたくさん採集できたにちがいない。また、行く日が暑かったことも言いえよう。もし、行く日が良くて夜が静かであったならば、船酔いもしなかつたろう（とは負けおしみであるが）、まったく不幸なことに台風が発生していたとは、ほんとうに悪い日に出くわしたものである。来年もまた行けるかどうかはわからないが、もし行けるのならば、このようなことを計算に入れてスケジュールを組んでいただきたい。次に期間をもっと長くしてもらいたい。そして今年のように一か所ではなく二か所ぐらひに決めて採集したならば、きっとおもしろい結果が得られるのではないかな。また、行く時期については今年のように夏休みが終わるころが良いと思う。しかし、潮の関係を調べて行けばまだ良いと思う。

最後に、枕崎の人は、大変親切で親しみやすい人たちであったと思う。これは、枕崎の

人たちが積極的であったからこのように思えたのかもしれないが……一般に船岸の人たちは気性が荒っぽいといわれているが、ぼくたちの見た、枕崎の人たちには、そのようなところはどこにもなかったように思われる。それに、枕崎の地方の言葉がわかったならば、もっともっと良かったと思う。同じ鹿児島県人でありながら、ことはわからないうちはまったく構はない。県外に就職した人たちが、言葉が通じないで悩むのも無理のないことであると思った。

うら話し

二年 浜木紀代

カツオブシといえば枕崎、枕崎といえばカツオブシ。ただこれだけの予備知識と、あの特徴のある枕崎言葉を思い浮かべながら、汽車にゆられること数時間、目的地の枕崎に着いたのはすでに夕方近くであった。

降りた駅は、大口あたりではちょっと見当たらない。ひなびた駅で「ああ、遠くに来たなあー」の感がひとしお深い。駅の正面には丘がくっきりと目につく。その丘をよく見ると、何か形どった植林をしてあるので、その模様を書き留め、帰宅後父に話したら、枕崎の市章を形どった植林だったそうだ。

それから満員バスにむりやりに乗せてもらい、道幅の広い市内を走り出す。途中高い建物が一つも見当たらないので、何となく平たい町に見える。

車中、大いに期待していた枕崎言葉が、ついに私に発せられた。カゴを背負ったおばさんが「どこから来やしたとやー」と、舌尾を上げ、全体を鼻にかけた。あの言葉がとび出し、私は、「きたな」と思ったが、その言葉がわからず、二三度聞きかえして返事した。としよりはもちろんのこと、若いきれいな女の人たちでさえ、アフレットの強い枕崎言葉を使って話しているのには、当然のことながら、ふしきなおかしさを感じた。

バスはどんどん平凡な道を走る。やがてそのうち、魚のすえたようなにおいが鼻をおそる。海辺のにおいというのであろう。

宿泊所立神小学校に着いた時は、もう日も暮れ、うす暗くなっていた。森田先生の親せきの方で、この小学校の先生をしていらっしゃる方に、いろいろとお世話をもらう。先生方は、この先生とその晩は夕食を共にされるため、私たちだけでささやく夕食の準備にかかる。

出采上がりは上々と言いたいところだが、残念ながらゴチゴチ御飯にサラサラのカレーで、女子の面目丸つぶれ……。そのとき、男子部員いわく「水加減はどこまでしたな」と。

翌朝も、先生や男子部員に申しわけないような朝食を終え、徒歩で10分、船岸に出る。途中の家々では家族みんなしてカツオをこしらえている。その手つきの速いことにおどろく。道で会うおばさん、おじさん、みな人なつこくて親切だ。「船に乗るのだ」と言うと、「きのうは海がなぎでいて酔かだったけど、きょうは少し荒れているから気をつけてなあ」と……。

入江を出るまで船は相当揺れる。船首の方を見ると、大きい波を、揺れるたびにかぶりちよっと心細い気がする。

波をかぶるたびにキャアキャア言っていた部員たちが、だんだん静かになってくる。ポンポン船のあの暖にこたえる振動と、においに、一人、二人と気分を乗くし、声を立てる音もなく、みんな蒼い顔になってしまった。

「立神」のいわれだという、観音ぼさつの形をした岩が、海中高く立っている。その岩を一回りして向うの海岸に着く予定だったけれど、みんなグロッキーになっていたのも、また元の入江に船をもどしてもらった、みんなずぶぬれになって、心身ともにくたくたになってしまう。それでも漁師のおじさんは、投げ網の投げ方や、魚の集め方を手振り身振りして教えてくれる。山里から出て来た私たちには興味深いことばかりだった。けれども船酔いにはどうしても身体が言うことを聞かない。せつかくのお話しもそこそこ聞き、ぬれた服を水拭いして干し、昼食をとる。

半ば乾きの服を着て、バスに乗ること10分、やがて採集目的地の海岸に着いた。

女子部員は腰までぬれ、貝やクラゲを、男子部員は水中に潜ってウニなどを採集した。名まえもわからぬまま、ありとあらゆる貝類や、きよく皮動物類を集めた。学校に帰って名まえを調べるのが楽しみで、半当り次第に採集した。

日も暮れ、うす暗くなった道を、ぬれた服を着て歩く私どもの姿には、さすがに浜辺の人々も声をかけず、後をふり返って見送っていた。

夕食には、カツオの大きなのを300円で買い、さしみと焼魚にしたが、料理がへたで、何とも印象の悪い食事の連続である。

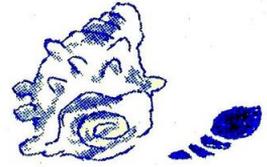
海水でバトバトになっているからだを乾かすため、町の鉄湯に行く。さっぱりしたよい鉄湯で助かった。

二泊三日の採集旅行は、無事目的を果し、帰りは明瞭岳を右に、左に、あるいは前後にその美しい姿にうっとりして、山川駅始発の列車で帰途につく。

汽車の中で、生物部に入っている体験をしたと、つくづく思った。



- と き……… 9月3日放課後
 ○ところ……… 生物教室
 ○司 会……… 山口 鞆田
 ○出席者……… 飯塚・浜木・川畑・田島・堅山・松元・
 集・三反田（イロハ唄）



— 二泊三日の枕崎での、いろいろ楽しかった事、おもしろかった事、また、今度からはこんなにしてほしいとか、その反省や 要望があると思います。それを今から話し合っていたきたいと思います。

浜木 一日目の夕食でカレーライスをしました。あんまりたくさん炊いたのははじめてなので、水の加減をまちがひ、コチコチのご飯をたいてしまって、チョットまずいでした。

松元 ほんとにあの夕食はまずかったな。（女子の方をチラッと見て）ご飯だけならまだいいけど、カレーが大変だった。水みたいなカレーに、肉は一皿に一切れが二きれ。

三反田 しかし、それがかえて今では楽しい思い出になっているね。だけど、あのカツオのさしみはとてもおもしろかったなあ。

— 自分たちで炊事したのですが。

一同 はい。

— 道具は持って行くということでしたが、どうしたのですが。

田島 学校（立神小）から貸してもらいました。

川畑 あちらの人はすごく親切でした。学校でも床の上に寝がされるものと思ってましたが、宿直の先生や、森田先生のお知り合いの先生のおかげで、ちゃんと宿直室に泊めてもらい、ふとんやがやまで貸して下さり、とてもうれしかったです。

— 集さんは、枕崎に着いて何をいちばん先に感じましたが。

集 いちばんはじめに感じたのが「言葉」です。ことにバスの中で向こうの人から方言でペラペラ尋ねられたときには、何と答えてよいかわからず、まよってしまいました。それに、何が、のんびりしたように思いました。

川畑 ほんとうに向こうの言葉はおもしろいでしたね。海へ行ったときにも人夫のおじさんが、おもしろい言葉でわたしたちにしゃべられたので、おがしくなって、つい吹き出してしまいました。

堅山 また、だるま船に乗ったとき、はじめのうちはたいへんおもしろかったのですが、あとになって、からだにじびれがはいてこわくなりました。

松元 ぼくは、船の中でねむくなりました。ほんとにねむくて！

飯塚 ちょうど、立神岩付近で急に気持ちが悪くなってきて！

田島 じびれがはいて、また、川畑さんがじびれがはいたとって泣き出した時はび

っくりました。

川畑 あのとときは、ほんとに死ぬのかと思いました。

三反田 又の人たちは急に色が白くなって、みんなインスタントの美人になれたね。船酔いしたおかげさまだよ。

集 自分でも酔ったくせに……、どうしてそんなことを看えるひまがあったの？

三反田 どうもジーゼルエンジンのためらしい。

野山 これはそうと、最後の夜はとっても楽しかったなあ、トランプなどととてもおもしろかった。それに長谷川君のシッパがいちばん痛かったなあ。

松元 ふだんはぼくはトランプは強い方なんだが、あのとときはどうも——。

田島 集さんは、いちばん早く寝て、いちばん遅く起きるんだから——やっぱり、家での習慣がはなれないのね。

集 はずかしいこと言わないで。

三反田・松元 採集期間が短かった。あと一日あったらよかったのですが——。

田島 采採は私はもう卒業だけど、連れて行ってね。

飯塚 そのためにも、やはり夏休みがいいですね。

(時間の都合で中途半端になる)

(不参加者の反省)

今年最後の夏休みというわけで、勉強をがんばろうと思い、参加しなかった。結局は不勉強に終わってしまったけれども……。参加者の話しを聞くと、とても楽しそうであらやましい。きょう、こうして話し合いをしてもらったけれども、時間の都合などもあり、肝心の採集のことが全然話に出てこなかったのは残念である。でも、海の生物をたくさん採ってきているのを見せてもらった。要するに、採集目的はちゃんと果してきているようすである。いろいろと反省や要領などもあるようだし、これを機に、来年度からはよりよい採集旅行ができるようにしてほしいものである。

— 山 口 —

Ⅳ. コシアカツバメの生息地

森田忠義

コシアカツバメ (*Hirundo daurica japonica* TEMMINCK & SCHLEGEL) は、わが国には夏鳥として渡来し、本州(宮城および富山県以南)、四国・九州にて繁殖し、晩秋に去る渡り鳥である。

体は首・頭上・後頭は金属光沢のある藍黒色、胸・喉・咽はわずかに赤味を帯びた白色、背・肩羽は藍黒色、尾・腹・脚・下尾筒は赤さび色の白色、腹・上尾筒は赤さび色であり、尾はすずけた黒色で、左右の一對は特に長く、一見ツバメと区別される。

南九州のツバメ屋を調べていると、大部分の種は通産するのであるが、ツバメと本種は繁殖している。なお、ツバメはほとんど全域にて営巣しているが、本種はほとんど特定の地域に限られており、鹿児島県下または南九州では大口市街地が最も多く繁殖している地域と思われる。筆者の観察では、県下では姶良郡栗野町の栗野駅(木直)に営巣している以外は他にその巣を見ない。

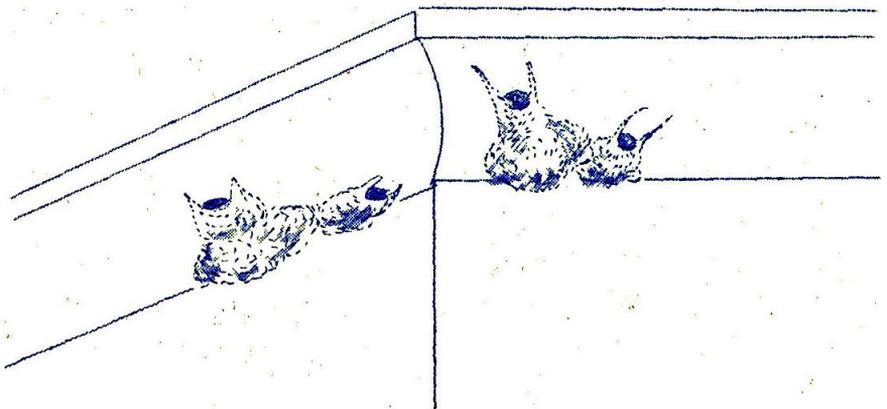
巣は、どろを主に、わらとで作り、ツバメが杯状のものをかけるのに対し、まったく奇妙な、徳利を横倒しにしたような形で、出入口は長く、25~30cmくらい以上も突き出し、基部は球状で、中には、わらや羽毛を敷いている。出入口はふつう一つであるが、二つあるものもあり、巣は、ツバメが取付するのに対し、巣皿でとまり合って営巣し、場所は特にコンクリートまたは石造の建物の軒下や壁等に多く見られる。木造建築物には多くは見られない。特に、冬期は積雪のある本地域では巣はほとんど冬の間にくずれ落ち、風雨を免れた巣はほとんどスズメが産卵して営巣する。

一般には、産卵や繁殖期のはじめにはお母または単独で生活し、繁殖後は家族連れが集団をなして採食行動をするのが見られる。ことに、産卵の臨近になると、同族がそろって巣の前の電線などにとまり、顔を見合わせ、何かささやき合っているさまは、奥に長途に対する話し合いをしているかのようなものである。地上にまい降りることはほとんどないが、明あがりの路上に降り、巣材の泥土を集めているのを見ることが出来る。なお、巣の構築等の際は、直立するコンクリートの壁に屋根の先端を当て、脚の指をたくみに使って静止しているさまは、キツキを思い出させる。

食物は、蛾類・半翅・双翅目のコシ虫で、ほとんど飛翔中のものをついばむ。筆者は風に吹き流されて行くモンシロチョウを本種がついばむものを目撃したこともある。

大口市では、市の中心部の商店街で南北に通ずる街道沿いに約300m、東西に30mの帯状の営巣地で、約90個の巣を作り(最も多く見られるものは旭相互銀行の24個と、大口電報電話局の26個の巣が見られる)、その周辺の田圃沿いの農家の物置や牛舎や、木直建ての工場等にはツバメが営巣し、住み分けが見られる。繁殖はツバメほど盛んでなく、ツバメが年に2~3回ふ化させるのに対し、巣の増加状況からして1~2回くらいではないかと思われるが、くわしくは今後の観察に待ちたい。

飛来するのはだいたい3月の中旬から下旬にかけて飛来し、營巢は4～5月初旬ごろまでが最盛期で、10月中・下旬から11月初旬にかけて飛去する（耳の気温、その他の影響により変動あり、39年は3月18日に先発隊を見る）。



Ⅹ. 生物部に思う

—こういう活動がほしい—

第3代助手 宮田和信

ぼくが大川高生として学んだのは、昭和34年から37年までであったが、その当時、生物部なるものがあつたかどうかは記憶に残っていない。もっとも、ぼくは中学のときから運動部に属し、文化部は自分の性に合っていなかつたから、少なからず疎遠なものであり、その点でも記憶に残るのがむづかしい。ぼくが現役で大学入試に失敗し、一年間母校の理科奥習助手として勤務していたとき、生物部の諸君が放課生物室で活動しているのを見てはじめてこの部の存在を知らされた。文化部は、前にも書いたように、ぼくには縁遠いものであつたが、理科室で働いていると、生物部・化学部・物理部の活動は、ぼくをも奮起させたものである。

こういうぼくが重を執ることは許されぬかもしれないが、ぼくが日ごろ、部入、とくに生物部について考えていることを書きたいと思う。

まず生物は、自然科学の高位置に体系づけられる学問であり、最近では生化学とは切り離せないものとなつてきているようであるが、これを正課外の知識としてまじめに迎へてみると考えている人が意外少ないのが現状である。それは、部員が少ないのが示すとおり。化学部・物理部を見ても、多数の部員が居んでいて、とくに物理部は毎日の活動のようである。部員が多ければそれだけ活動も活発になり楽しみも増す。多数の中に規律と秩序があれば、……今は生物部では人数が増えてほしいところ。

さて、活動の内容に駆けてみよう。ぼくが知つたはじめ、生物部は採集部であつた。そして現在もそれは変わっていないようす、部員が増えても採集部であつては少々無味乾燥なのではあるまいが、採集旅行は、生物部の活動では最も楽しいもの。そして部員諸君は楽しみのために部生活を送るかもしれないが、もっと地味な活動も欲しい。地味な活動とはちょっとおがしいが、いわゆる本での学習、そして採集以外の何かの研究である。ぼくが考えているのは、サークルでもつくり、本を眺みながら討論研究をしたり、小動物・鳥類のはく製等をやることだ。ぼくが勤務していたとき、一度は部員諸君に話し、その賛同を得たのであるが、文化祭があるなどのためについに実現しなかつた。物理部のごとくラジオつを研究しているラジオ部はそれでよいが、採集部ではいけない。時に後者のほく製作りは、良き先生ありで、生物部ならではの産物となる。生物準備室の亜硫酸・フクシン等は利用率が低い。これらの製品を自由に使えるようになることは、生化学的生物学であり、それを行なう生物部員の誇りである。

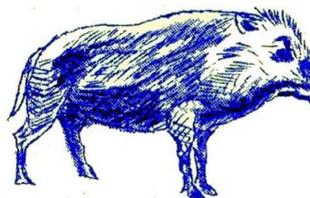
現在は、入試のための競争勉強でなければやってゆけない、「高校教育はこれでよいのか」などといふ議論がなされているが、今はそれも問題ではなさそうだ。だから生物部はいろいろな方面から見る生物のほんとうの愛好者の集う場であり、生物の学習を愛好する人の集いの場であつてほしい。

ぼくの意見は化学部が断片的に実行している。化学部の活動はぼくの意見の活動だ。娯楽活動であり、充実した化学学習活動である。

ぼくの提案したのは、本（教科書でもよい）をいっしょに読み、討論研究されたい、ということだった。問題集の解答でもよい。生物関係の1冊でもよい。平凡な生物部ではない。非凡な生物部である。そうなるとはじめて部員全員が集まるようになり、魅力も増す。今回、機関誌が出たわけであるが、これは先生方と部員の汗の結晶である。部活動のあらわれである。これを機会に、ますます向上する生物の活動を期待したい。

いろいろ生物独自の研究があるうが、それは部員諸君の方がよく知っている。スポーツ部にはない娯楽の中に学習を加えた生物独自の活動が重要である。

生物部員諸君、生物部の誇りとなるものを！



ⅩⅠ. 部の活動記録

○37年度

- 5月5日 栗野岳採集（植物を主とし、他にユン虫類種）
タマネギの表皮観察
カエルの解剖
- 6月 大口城山附近採集（植物が主）
カエルの解剖
- 7日 ミミズの解剖 採集物整理
- 8日 採集物整理
- 9日 展示会のための秋の草木採集（学校附近）
展示会……採集物・標本・カエルの筋肉運動（新納先生による）展示
- 11日 龜ヶ崎採集
- 1日 採集物整理

○38年度

- 5日 タマネギの表皮観察 カエルの解剖
- 7月 高柳池採集（水中生物）
- 8月25日 枕崎採集旅行 27日まで
- 9日 枕崎採集物整理
展示会
- 11月 布計サンショウウオ採集
- 2月 } 機関誌発行準備
3月 }

----- 部 員 名 簿 -----

有馬 正道	大口市西戸切	富 吉 安 子	始良郡吉松町
集 美奈代	菱川町田中	永 上 善 弘	大口市針持
飯 塚 典 子	大口市善木2034	長谷川 彦	大口市西太良
太 田 礼 子	菱川町下市川	真 木 紀 代	大口市立神公任
川 畑 伊建子	菱川町前目下	東 あづ子	菱川町前目上
鶴 田 慶 子	栗野町	松 元 正 実	大口市篠原2045
三反田 久	大口市牛尾	山 口 裕 子	大口市木之浜
野 山 実 行	大口市西太良	若 松 照 男	大口市針持
田 島 喜代子	菱川町田中		

（五十音順）

お ち ぼ

伊佐の野に^{いさろう}曇気凌現われる。場所は伊佐平野を流る川内川の上流、吉松・栗野・湯之尾を流る本流と羽日月との合流点のデルタ地帯で、川の両岸は低い台地の桑畑等で平野はえんえんと続く水田、はるか東の方は国見岳（十曾）の山々で、麓に大口やその近郊の町や村がある。

が これらの景色は普通は見えない。ところが今から40年ぐらい前の話で、桑畑で桑の手入れをしていた老人達の目に映った事で、十曾の山腹に倒立した町の家々が見えたとのことで、老人たちはキツネにだまされたと、きもをつぶし、仕事をやめて逃げ帰り気味悪がったとのことである。（長谷川先生談）

このような現象は、地上や海上の大気の密度が高さにより増減する際におこる。砂漠では夕方か日が沈むころになると、日中熱せられた地面が急に冷え、地面に近い部分は冷え、上層はあたたかいまま残るため、大気差を生じ、一種の大気の凸レンズができたようなもので、遠くは立像や倒像が見え、また、伸縮されたものができる。 — C・M —

編集を終えて

最初の予定では、昨年の12月末日に完成させるつもりでしたが、なにぶんはじめての機関誌発行のため要領を得ず、延び延びになってしまい、とうとう今日に至ってしまいました。不慣れな編集のため、見にくい点もあると思いますが、おゆるしくください。編集内容など今後さらに向上させていきたいと思っております。（H・I）

昭和39年3月25日印刷

昭和39年3月31日発行

編集発行

鹿児島県立大口高等学校

生物部

印刷 イサム工房

大口市下元町 TEL823